

研究報告

サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の検討
—子どもの記述を手がかりに—高山清敏^{1,2}, 牧野智恵^{1,8}, 松本友梨子³, 加藤亜妃子⁴野口絵理奈^{1,2}, 我妻孝則⁵, 北本福美⁵

概要

本研究の目的は、乳がん患者とその子どもによるサポートブック作成プロセスにおける、子どもの記述内容及び対話内容の特徴を明らかにし、サポートブック作成の効果を考察することである。研究対象は、乳がん患者とその子どもを支援するプログラムである『おやこのたのしいじかん』に参加した5組の親子の作成したサポートブックのうち、5人の子ども（4歳児2名と7歳児3名の子ども）の記述と作成プロセスにおける会話内容である。

データを質的帰納的に分析した結果、記述内容の特徴として【親への思いやりの気持ち】【日常の親の姿】【子どもにとって心に残る出来事】の3つのカテゴリー、会話内容の特徴として《子どもの発達段階に応じた回答手段の特徴》《子どもなりに楽しんでいる様子》《親子で対話を楽しむ》などの6つのカテゴリーが抽出された。

親子でサポートブックを作成することによって、子どもから母親への素直なメッセージや、子どもの発達段階に応じた作成プロセスを楽しめており、親子のコミュニケーションを深める機会になっていることが示唆された。

キーワード サポートブック、親子への支援、乳がん患者の子ども、家族

1. はじめに

女性特有のがんである乳がんは、1960年頃からその罹患者数・死亡者数ともに年々増加している。現在、年間5万6千人以上が乳がん罹患者と推定され、また年間1万2千人以上が亡くなっている¹。また、乳がんの発症率は子育て世代である30歳代前半から急増し、45-49歳でピークを迎える¹。

女性のライフサイクルにおいては、20歳・30歳代の患者では、結婚・妊娠を希望しているが、乳がんの罹患により見通しが立たないことで不安が強まることもある。また40歳・50歳代では、家庭や社会において担っている大きな役割を遂行することが困難になることが挙げられる。そして、乳がんは初発治療後10年間という長期間に渡って経過をみていく必要がある¹。

子どもをもつ乳がん患者は、“子どもの存在”により、母親としての責任を実感し、死の恐怖や手術への不安が大きく心理的に不安定な中で、生き続ける価値を見出し治療への意欲を獲得することが報告されている²⁾。しかし、化学療法の副作用による家事・育児への支障や、病気により行動範囲や他者との付き合いに制限が生じるなどの理由により、子どもへの負担感を持つことも報告されている²⁾。また、治療の影響によって子どもの世話が困難になることや、ボディイメージの変調により母親としてのアイデンティの揺らぎが生じるなど、母親役割の遂行に困難が生じることが少なくない^{2,3)}といわれている。

一方、親ががんに罹患することは、母親の病状や特性不安に関係なく、その家族の一員である子どもにも様々な感情を引き起こす^{4,7)}。例えば、学童期の子どもでは、目の前にいる親の痛みに敏感に反応し、親の症状や周囲への気遣いをしながら

¹ 石川県立看護大学² 金沢大学附属病院（現所属）³ 福井県済生会病院⁴ 名古屋市立大学⁵ 金沢医科大学附属病院⁸ 責任著者¹ がん情報サービス—国立がん研究センターがん対策情報センター
<http://ganjoho.jp/public/index.html>

らも、親が入院したら自分の世話は誰がするのか、ということと同時に心配しているケースが報告されている⁴⁾。また、母親の言うことを聞かなかつたから、母親が病気になったと感じる子どももいるといわれている⁵⁾。思春期の女子では、世界がひっくり返ったように感じながらも、親のがんを無視しようと試みたり、治療が親を救ってくれると信じたり、家庭での母親の役割を担おうとするなどのケースが報告されている⁶⁾。思春期においては、子どもの発達段階上適切と考えられている親に対する怒りを持つことに、子ども自身が罪悪感を持つことにより、親とのぶつかりや葛藤を体験できないまま、親との分離という発達課題の達成へ影響を及ぼす可能性があることが報告されている⁷⁾。また、親の病状が進行し死別した場合、十分な別れが出来ていない場合、登校拒否になるなど、トラウマとなるおそれがあることもいわれている⁸⁾。

そのため、がん患者である親だけではなく、その子どもも含めたサポートが必要である。特に、子どもにおける効果的なストレス対処に有効なものとしては、専門家による親子間のオープンコミュニケーションへの支援の必要性^{6,9,10)}や、子ども自身が当事者であると感じられるようサポートすることが、子どもたちの将来的なトラウマを防ぐために重要であるといわれている⁴⁾。

そうした中で近年、わが国においても、がん患者とその子どもに対する、家族を一つの単位とした支援が行われてきている^{ii, iii)}。

それらの支援の一つに、がんを患う親とその子どもを支えるための絵本であるサポートブック¹¹⁾がある。この絵本は、がんを患う親と、その子ども達を支えるためのコミュニケーションツールになるガイドブックをつくろうという機運から活動が始まり、2008年に中国地方で発刊された。その後大きな反響を呼び^{iv)}、全国に広まった。しかし、サポートブックの作成プロセスや有効性に関する研究は十分になされていない現状がある¹²⁾。

このような背景のもと、本学の牧野研究班(科学研究助成・基礎研究C)が、平成24年8月から乳がん患者とその子どもと一緒に支援するプログラムである『おやこのたのしいじかん』を実施した。

そこで本研究では、このプログラムの中での親子のサポートブック作成プロセスにおける、子どものサポートブックへの記述内容と対話内容の特

徴を明らかにした上で、サポートブック作成の効果考察し、乳がん患者とその子どもへの支援方法の一つとして検討していくための一助とした。

2. 研究方法

2.1 研究対象

本研究では、乳がん患者とその子どもを支援するプログラムである『おやこのたのしいじかん』に参加し、研究協力に同意が得られた親子のうち、幼児期後期(4歳)2名と学童期前期(7歳)3名のサポートブックの記述内容及び作成プロセスにおける対話内容を研究対象とした。なお、子どもは母親の病名を知らされており、また母親は通院治療継続中の者とした。

2.2 研究実施の場

A 県内の乳腺外来をもつクリニック

2.3 実施日

平成24年8月4日(土)、9月1日(土)

2.4 データ収集方法

(1) 親子で一緒に「サポートブック」を作成してもらった。(約40分間)

なお、今回研究に用いたサポートブックは、全てのページに動物のイラストが描かれ、「(子ども)なまえのゆらい」「(子ども)がうまれた日はどんな日だった」「おとうさん、おかあさんからみて(こども)のすきなところは」など、20項目の質問が書かれたページと自由記載からなる。今回は、時間の都合上20項目のうち15項目の質問を指定し記載をしてもらった。また、今回既存の項目に加え、「母親(子ども)が改めて発見したこと」「母親(子ども)へのメッセージ」「母親(子ども)が改めて発見したこと」という質問を追加し、研究に用いた。

(2) 録音の承諾が得られた親子のサポートブック作成中の対話をICレコーダーに録音した。

ⁱⁱ⁾ 小澤美和(2011):がんを持つ若い親とその子どもたちへの支援

http://www.luke.or.jp/about/approach/pdf/ra14/research_activities_142.pdf

ⁱⁱⁱ⁾ 小林真理子(2011):がんを持つ親の子どもへのサポートグループに関する研究—聖路加国際病院

http://www.luke.or.jp/about/approach/pdf/ra13/research_activities_13_12.pdf

^{iv)} サポートブック親子のうたがききたくて—中国新聞社

<http://www.chugoku-np.co.jp/kikaku/supportbook/index.html#001>

2.5 データ分析方法

(1) サポートブックの記述内容の分析

サポートブックから、子どもの記述内容（代筆含む）を抜き出し、意味内容の類似性や差異性に基づいて、カテゴリーを形成した。さらに、各カテゴリーの内容を、4歳児と7歳児で分類し、それぞれの特徴について比較した。

(2) 対話内容の分析

録音した対話を逐語録に起こし、子どもの発言の特性を中心に抽出し、意味内容の類似性や差異性に基づいて、カテゴリーを形成した。さらに、各カテゴリーの内容を、4歳児と7歳児で分類し、それぞれの特徴について比較した。

2.6 倫理的配慮

本研究は、本大学及び実施施設の研究倫理委員会の承諾を得た後に実施した（看大第1283号）。

参加した母親に、研究の主旨と倫理的配慮（研究に参加しなくても不利益を被ることがないこと、研究参加中止の自由、プライバシーの保護、得られたデータは本研究の目的以外に用いることはないこと、データの保管は研究者が責任をもって行うことなど）を文書と口頭で説明し、同意が得られた後に行った。また、調査中に体調不良、不安などが見られた場合には、ただちに同席している専門家（医師、看護師）と連携がとれる体制を整えて実施した。

なお、研究対象となる子どもへの説明と同意は、その母親への説明と同意をもってなされることとした。

3. 結果

3.1 研究対象者の概要（表1）

今回参加した子どもは、幼児期後期にあたる4歳児が2名、学童期前期にあたる7歳児が3名であった。

3.2 サポートブックの記述内容にみる4歳児、7歳児の特徴（表2）

子ども自身がサポートブックに記述した文字数は、4歳児では、2人の子どもの全てのページにおいて5文字のみであった。一方、7歳児では、1つの質問に最大75文字の記述がみられた。

また、サポートブックの記述内容を分析した結果、3つのカテゴリーと、8つのサブカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを【】、特徴的な記述内容を「」で示す。

【親への思いやりの気持ち】は、子どもが親へ伝えたい思いを示している。4歳児、7歳児ともに、「ありがとう」「おかあさんいろいろしてくれてありがとう」など、【母親への感謝の気持ち】がみられた。7歳児では加えて、「いつもありがとう いつもおつかれさま ままいつもがんばってね」など、【母親の労をねぎらう気持ち】【母親の身体を気遣う気持ち】がみられた。

【日常の親の姿】は、子どもの視点からみた両親の姿を示している。4歳児では、「ママ・・・せんたくたんでいるところ」、7歳児では、「いつもおいしいりょうりをつくってくれるところ」など、【子どもから見える親のイメージ】【親が子どもにしてくれる行為】がみられた。

【子どもにとって心に残る出来事】は、子どもの心に残っている思い出を示している。4歳児では「クッキング、おえかき、おべんきょう」、7歳児では、「まいにちがたのしいです」など、【子どもにとって日常的な場所や出来事】がみられた。また4歳児、7歳児ともに、「とうきょうスカイツリー」、「りょこうやとうきょうなど」と【家族との楽しい旅行】がみられた。同様に、4歳児では「楽器を演奏したこと」、7歳児では「こんなたのしいえほんつくったことがありません。たのしかったです。」など、【今日のプログラム】を楽しめたことが記述されていた。

表1 対象者の概要

	子どもの 年齢/性別	母親の概要		
		年齢	診断時期	現在の治療
a	7歳/男	40歳代前半	2年1ヵ月前	ホルモン療法
b	7歳/女	30歳代後半	0年8ヵ月前	放射線療法, 術後化学療法
c	7歳/女	40歳代前半	1年9ヵ月前	ホルモン療法
d	4歳/男	30歳代前半	0年11ヵ月前	ホルモン療法
e	4歳/女	30歳代後半	1年1ヵ月前	術後化学療法

3.3 親子の対話内容にみる4歳児, 7歳児の特徴 (表3)

サポートブックの作成プロセスにおける対話内容を分析した結果, 6つのカテゴリーと, 9つのサブカテゴリーが抽出された。以下, カテゴリーを《》, サブカテゴリーを〈〉, 特徴的な対話内容を「」で示す。

《子どもの発達段階に応じた回答手段の特徴》は, サポートブックの質問に対して, 子どもが自分の思いを母親へ伝える際にみられた様々な回答

手段を示している。7歳児では, 母親の「行ってみたいとどここ?」の問いかけに対して無言で自分の答えを書き込む様子がみられ, 4歳児では, 母親の「ママとパパの好きなところ言って, 言って」の問いかけに対して, 「ママは洗濯しとったのが面白かった」と言葉で答えるなど, 〈母親の問いかけにより自ら記入する〉〈母親の問いかけに対して言葉で答える〉がみられた。また, 4歳児では, 母親の「eと一緒にしてたのしかったことは?」の問いかけに対して, 子どもは「うーん,

表2 サポートブックの記述内容にみる, 4歳児, 7歳児の特徴

【カテゴリー】	【サブカテゴリー】	年齢	「記述具体例」 □内は代筆
【親への思いやりの気持ち】	【母親への感謝の気持ち】	4歳	「ありがとう。」
		7歳	「おかあさんいろいろしてくれてありがとう」 「こんなことがあったっていいことも おかあさんがこういふことになったから こんなたのしいことをできたんだとおもいました ほんとうにおかあさんにかんしゃをしないとなあとおもいました。」
	【母親の労を労う気持ち】	4歳	————
		7歳	「いつもおつかれさま」
	【母親の身体を気遣う気持ち】	4歳	————
		7歳	「ずっと元気でいてね」
【日常の親の姿】	【子どもから見る親のイメージ】	4歳	「おもしろいところ, えがお。」 [おとうさん: かっこいい おかあさん: かわいい]
		7歳	「ママはおこったらこはいけど やさしいです」 「とってもやさしくて, おこってくれるとこもやさしいとおもいました」 「おこりんぼうだけやさしいときもある」 「やさしい人 おもしろい人」
		4歳	「せんたくたんでいるところ」 [ママ: せんたく, ごはんつくってる] [とーちゃん: おしごといくの]
			7歳
	【親が子どもにしてくれる行為】	4歳	「たくじょ おかいものするところ」 [クッキング, おえかき, おべんきょう] [べんきょう. 今, 数字のべんきょうしてます]
		7歳	「まいにちがたのしいです」 [夏休みに行ったプールでお弁当をいっしょに食べれたたのしかった]
【子どもにとって心に残る出来事】	【子どもにとって日常的な場所や出来事】	4歳	「とうきょうタワー みにいきたい」
		7歳	「とうきょうスカイツリー」 「りょこうやとうきょうなど」 「かぞくりょこうです。」
	【家族との楽しい旅行】	4歳	「楽器を演奏したこと」
		7歳	「とてまたのしかったです」 「こんなたのしいえほんつくったことがありませんたのしかったです。」
	【今日のプログラム】	4歳	「楽器を演奏したこと」
		7歳	「とてまたのしかったです」 「こんなたのしいえほんつくったことがありませんたのしかったです。」

こうやってやりながら」と、〈母親の問いかけに対してジェスチャーで答える〉もみられた。

《子どもなりに楽しんでいる様子》は、サポートブック作成中に子どもが楽しんでいる様子がみられたことを示している。7歳児では、母：「これ、色鉛筆、マジックで書いた方が良いみたい」、子：「マジックで書いた方が見やすくない?」、母：「ほんとやね、マジック」と、答える様子がみられた。4歳児では、「お絵かきしたい。どこに書く?」と話す様子がみられるなど、〈筆記用具選びを一緒に楽しむ〉〈お絵かきをしながらその場を楽しむ〉がみられた。

《自分も参加したい気持ちの表出》は、子どもがサポートブック作成に意欲を出している様子を示している。4歳児では、「お絵かきしたい。どこに書く?」との発言がみられた。また7歳児では、母：「ねえ、bちゃん、妹の相手しとって。ここもお母さん書かんなんし。お母さんしか書かれんし」、子：「はあ?書きたい。」、母：「書く場所いったらお母さんとかわってあげるし。」、子：「つまらん。」など、〈他の子どもや母親の様子に触発され書きたい気持ちを表している〉がみられた。

《親子で対話を楽しむ》は、母子で楽しい対話をしている様子を示している。4歳児では、母：「ママと一緒にしたいことある?」、子：「あるあるしたいこと」、母：「ママ、今、勉強したい。」、子：「1, 2, 3, 4!」、母：「そうそう。」という様子がみられ、7歳児ともに、〈サポートブックの質問をきっかけに親子の対話を楽しんでいる〉がみられた。

《母親の入院時の出来事を思い出す》は、親子の対話において、母親の病気の話題になった様子を示している。7歳児の1組の親子において、母：「家族みんなで、デイズニーランドへ行きたい。行くはずやったやろう。そしたら行けんくなっちゃったじゃん」、子：「なんで?」、母：「おかあさん病気になったで」と、対話から〈サポートブックの質問をきっかけに母親の病気の話題に展開している〉がみられた。

《サポートブック作成の場から離れる》は、子どもがサポートブック作成場所から離れている様子を示している。4歳児では、1人の子どもが開始5分でトイレへ行き、開始8分で近くに来た入院患者の所へ行き、開始24分で他の子どもの所へ行く様子がみられた。7歳児では、1人の子どもが開始24分でトイレへ行き、開始35分で母

親の元を離れソファへ行く様子がみられた。サポートブック作成中に、〈母親の元を離れる〉子どもがみられた。

4. 考察

今回の分析の結果、4歳児、7歳児の記述内容や対話内容の特徴が明らかになり、共通する特徴や、発達段階により差異がみられるものがみられた。以下、親子でサポートブックを作成することの効果、及びサポートブック作成支援時に必要と考えられる配慮について考察したい。

4.1 親子でサポートブックを作成する効果

(1) 子どもから母親へのメッセージが母親を支える

日常生活において、子どもが母親への感謝を表す機会は少ないとの報告がある^v。

今回作成されたサポートブックでは、4歳児、7歳児ともに【親への思いやりの気持ち】を表現していた。特に7歳児では、《母親の労をねぎらう気持ち》《母親の身体を気遣う気持ち》が表現されている。これらのことから、本研究のサポートブック作成は、子どもが母親への感謝の気持ちを含む、【親への思いやりの気持ち】を伝えられる機会になっていると考えられる。特に7歳児では、《母親の労をねぎらう気持ち》《母親の身体を気遣う気持ち》のカテゴリーには、子どもの母親に対する共感する力や慈しむ力が表現されており、子どもが母親を思いやる気持ちが含まれていた。

がん患者である母親にとっては、子どもからの励ましが生への希望を後押しする¹³⁾という報告がある。このことから、今回の親子によるサポートブック作成は、親への思いやりの気持ちを伝える機会となり、そして子どもによる母親への情緒的支援につながるといえるのではないだろうか。

また、4歳児、7歳児ともに記述内容の特徴において、【日常の親の姿】がみられ、また【子どもにとって心に残る出来事】では、【子どもにとって日常的な場所や出来事】が含まれていた。これらのことから、子どもにとっては、母親の日常の姿や日常の生活が心に残っていると考えられる。

子どもをもつ乳がん患者は、治療中に母親役割(家事や育児など)の遂行に困難を感じ、母親

v 日本と他の国との「ママへの感謝の態度・行動」の違い— P&G
<http://media.jp.pg.com/release-pdf/20120509p01.pdf>

表3 親子の対話内容にみる、4歳児、7歳児の特徴

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	年齢	「特徴的な対話内容」や子どもの様子
《子どもの発達段階に応じた回答手段の特徴》	〈母親の問いかけにより自ら記入する〉	4歳	母:「お手紙書いてよ。」 子:「良いよ。」と答え,「ありがとう」と記入。
		7歳	母:「行ってみたいとこ,どこ?」 無言で,「りょこうやとうきょうなど」と記入。
	〈母親の問いかけに対して言葉で答える〉	4歳	母:「ママとパパの好きなところ言って.言って。」 子:「ママは,ママは洗濯しとったのが面白かった。」
		7歳	母:「aが,お母さんのことで,あたらしくはつけんしたことは?言ったとおりに書くよ.何て書いたらいい?」 子:「えっと,普段より優しかった。」
	〈母親の問いかけに対してジェスチャーで答える〉	4歳	母:「eと一緒にしてたのしかったことは?」 子:「うーん,こうやってやりながら。」 母:「楽器?楽器?今か.何のやつ?」
		7歳	——
《子どもなりに楽しんでいる様子》	〈筆記用具選びを一緒に楽しむ〉	4歳	子:「ねえねえ,このピンク色貸して.ピンク色と水色。」 母:「何か書くの?」 子:「何か書くけど,内緒。」
		7歳	母:「これ,色鉛筆,マジックで書いた方が良いみたい。」 子:「マジックで書いた方が見やすくない?」 母:「ほんとやね,マジック。」 子:「あー,何色の方が見やすい?赤?赤?」
	〈お絵かきをしながらその場を楽しむ〉	4歳	子:「お絵かきしたい.どこに書く?」 サポートブックや別紙に,歌いながら絵を描いている。
		7歳	子:「ねえ,ママ,これ,ここに色塗っていいが?」 別紙に絵を描いている。
《自分も参加したい気持ちの表出》	〈他の子どもや母親の様子に触発され書きたい気持ちを表している〉	4歳	子:「お絵かきしたい.どこに書く?」 サポートブックや別紙に,歌いながら絵を描いている。
		7歳	母:「ねえ,bちゃん,(bの妹)の相手しとって.こもお母さん書かんなんし.お母さんしか書かれんし。」 子:「はあ?書きたい。」 母:「書く場所いたらお母さんとかわってあげるし」 子:「つまらん。」
《親子で会話を楽しむ》	〈サポートブックの質問をきっかけに親子の会話を楽しんでいる〉	4歳	母:「ママと一緒にしたいことある?」 子:「あるあるしたいこと」 母:「ママ,今,勉強したい。」 子:「1,2,3,4!」 母:「そうそう。」
		7歳	母:「cと一緒にいて楽しかったことは?」 子:「楽しかったとは…」 母:「毎日です。」 子:「毎日,何?」 「毎日暮らしたこと?ふふ。」
《母親の入院時の出来事を思い出す》	〈サポートブックの質問をきっかけに母親の病気の話題に展開している〉	4歳	——
		7歳	母:「家族みんなで,ディズニーランドへ行きたい.行くはずやったやろう.そしたら行けなくなっちゃったじゃん。」 子:「なんで?」 母:「おかあさん,病気になったで。」 子:「がん?」 母:「うん.だって,行こうって言ったところに,がんになって行けなくなっ,だめやっせん。」
《サポートブック作成の場から離れる》	〈母親の元を離れる〉	4歳	開始5分で,トイレへ行く。 開始8分で,近くに来た入院患者の所へ行く。 開始24分で,他の子どもの所へ行く。
		7歳	開始24分で,トイレへ行く。 開始35分で,母の元を離れ,ソファへ行く。

としてのアイデンティティの揺らぎを感じやすい²³⁾と報告されている。そこで、本研究の親子によるサポートブック作成により、母親は、子どもにとっては日常的な家事を行う母親の姿や日常的な出来事が心に残っていることを知ることができ、このことによって母親としての役割が果たせていないという困難感²³⁾の軽減につながるのではないだろうか。

(2) 発達段階に応じたサポートブック作成の意義

子ども自身がサポートブックに記述した文字数は、4歳児（全ページにおいて5文字）と7歳児（1ページにおいて最大75文字）において差がみられた。これは子どもの4歳児と7歳児の発達段階の違いによるものである。

清音と撥音の46文字を範囲とした書字率は、4歳代後半で4分の1、そして6歳代の後半で4分の3の文字が書けるようになる¹⁵⁾といわれている。そのため、4歳児では自分の思いを文字で表現することは難しい。

今回の結果では、4歳児において、〈母親の問いかけに対して言葉で答える〉〈母親の問いかけに対してジェスチャーで答える〉〈お絵かきをしながらその場を楽しむ〉など、文字を記入することの代替手段を用いている様子がみられた。

特に、書きことばを獲得するまでに至っていない幼児にとって、絵は“具体的な、生きたことば”である¹⁶⁾といわれている。4歳児に「お絵かきしたい、どこに書く？」の発言がみられるように、子どもなりに絵をかくことで、サポートブック作成に関わることができているのではないかと考えられる。

4歳児、7歳児ともに【子どもにとって心に残る出来事】の『今日のプログラム』において、「こんなたのしいえほんつくったことはありません。たのしかったです」と、サポートブック作成を楽しめたことが記述されていた。対話内容からは、『子どもなりに楽しんでいる様子』『親子で対話を楽しむ』がみられた。

これらのことから、サポートブックは、子どもの発達段階に応じた利用の仕方が可能であり、かつ親子でコミュニケーションを図りながら、そのプロセスを楽しむことができるツールに成り得ると考えられる。

4.2 サポートブック作成支援時に必要と考えられる配慮

(1) 母親の病気の話題が出る可能性への配慮

今回用いたサポートブックの特徴として、お互いを思う気持ちが通じ合えばいいという思いを込め、あえて“がん”や“生命”などの言葉を用いていないことが挙げられている¹¹⁾。

しかし、今回7歳児の1組の親子において、〈サポートブックの質問をきっかけに母親の病気の話題に展開している〉がみられた。子どもをもつ乳がん罹患した母親は、自分の病気を子どもに伝えることを躊躇しているという報告がある¹³⁾。そのような子どもに自身の病名を伝えられずとまどっている母親への支援こそ必要と思われる。今回は、子どもに母親の病名を伝えてある親子を対象としたため親子で自然に母親の病気の話題に至ったが、病名を子どもに伝えていない対象者を支援していくためには、事前に子供に病名を伝えているか否かを確認することや、子どもに伝えていない親子とそうでない参加者の場所を離す、母親だけの対話のセッションの際は、子どもにその対話内容が漏れないようにするなどの配慮が必要と思われる。

(2) 子どもの発達段階に合わせた工夫

一般的に、3歳児が注意を持続できるのは10～15分程度であり、年齢とともに持続時間が長くなり、5歳頃には30分くらいは持続できるといわれている¹⁸⁾。

今回、サポートブック作成の時間設定は約40分間であった。プログラム中、〈母親の元を離れる〉子どもは、4歳児、7歳児ともに1児ずつみられたが、他の3児は、最後までテーブルについていたことから、子どもの集中力の持続には個人差がみられた。

また、前述のように発達段階によっては文字で自分の思いを表現することが難しく、今回4歳児では絵を描くことで、サポートブック作成に参加する姿がみられた。

これらのことから、子どもの発達段階を考慮した時間設定を行った上で、プログラム中でも子どもの様子から柔軟に時間配分を行うこと、また、サポートブック作成前に、思いの表現方法は自由であることを親子に伝える、という工夫が必要ではないかと考えられた。そのことにより、親子によるサポートブック作成は、より充実した支援になるのではないだろうか。

5. 結論

サポートブックの子どもの記述内容では、【親への思いやりの気持ち】【日常の親の姿】【子どもにとって心に残る出来事】の3つのカテゴリーと、8つのサブカテゴリーが抽出された。

サポートブック作成中の子どもの対話内容では、《子どもの発達段階に応じた回答手段の特徴》《子どもなりに楽しんでいる様子》《自分も参加したい気持ちの表出》《親子で対話を楽しむ》《母親の入院時の出来事を思い出す》《サポートブック作成の場から離れる》の6つのカテゴリーと、9つのサブカテゴリーが抽出された。親子で一緒にサポートブックを作成する効果として、子どもから母親へのメッセージが母親を支えることや、発達段階なりの作成プロセスが親子の楽しいコミュニケーションの場になることが示唆された。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました親子の皆様、クリニック及び関係者のスタッフの皆様様に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成24年度科学研究費助成事業基盤(C)「がん患者とその子どもへの支援プログラム開発」(研究代表者：牧野智恵、24593316)の助成を受けて行った。

利益相反なし。

引用文献

- 1) 阿部恭子, 矢形寛編集: 乳がん患者ケアガイド. 学習研究社, 136-139, 2006.
- 2) 内山美枝子, 青山友香里: 若年性乳がん体験者のライフストーリーからみる治療過程における『子の存在』の意味づけ. 第41回日本看護学会論文集(母性看護), 126-129, 2011.
- 3) 茂木寿江, 大山ちあき, 藤野文代, 他1名: 子どもを持つ乳がん患者が抱く希望. The Kitakanto Medical Journal. 60 (3), 235-241, 2010.
- 4) 大曲睦恵, 石田裕二: 成人がん患者の子どもへの支援の中で表出された言語的・非言語的表現内容の検討. 日本小児科学会雑誌, 116 (5), 866-873, 2012.
- 5) 林ふり子: 緩和ケア Q 73. 柴田一郎編: 看護技術 4月臨時増刊号. メヂカルフレンド社, 150-151, 2010.
- 6) Stiffler D., Barada B., Hosei B., et al.: When mom has breast cancer: adolescent daughters' experiences of being parented. Oncol Nurs Forum, 35 (6), 933-40, 2008.
- 7) Christ, G. H., Siegel, K., Sperber, D.: Impact of parental terminal cancer on adolescents. Am J Orthopsychiatry, 64 (4), 604-613, 1994.
- 8) 伊藤理砂, 門田和代, 山口龍彦: 残される小さな子どもに対する配慮. ホスピスケアと在宅ケア, 12 (3), 219-222, 2004.
- 9) Birenbaum L.K., Yancey D.Z., Phillips D.S., et al.: School-age children's and adolescents' adjustment when a parent has a cancer. Oncol Nurs Forum, 26 (10), 1639-1645, 1999.
- 10) Osborn T.: The psychosocial impact of parental cancer on children and adolescents: a systematic review. Psychooncology, 16 (2), 101-26, 2007.
- 11) サポートブック作成プロジェクトチーム(著・編), accototo ふくだとしお+あきこ(イラスト): 親子をつなぐサポートブック. PHP 研究社, 2009.
- 12) 柴田亜弥子: 予後告知を受けたがん患者が子どもへの想いをサポートブックに託した事例. 日本家族看護学会第19回学術集会プログラム抄録集, 150, 2012.
- 13) 越塚君江, 神田清子, 藤野文代: 女性生殖器がん患者の家族への思いとそれに対する看護援助. 岡山大学医学部保健学科紀要, 16, 31-38, 2005.
- 14) 妹尾未妃: 中年期乳がん患者の乳がん罹患後の人生の希望と不安 家族や同病者, 重要他者からのサポートとの関連について. 母性衛生, 50 (2), 334-342, 2009.
- 15) 島村直己, 三神廣子: 幼児のひらがなの習得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して—. 教育心理学研究, 42 (1), 70-76, 1988.
- 16) 秋葉英則, 白石恵理子, 杉山隆一監修: こどもと保育 4歳児 改訂版. かがわ出版, 151, 2011.
- 17) 大野朋加: 手術を受ける乳がん患者の母親としての悩みとサポート. 看護技術, 55 (2), 147-150, 2009.
- 18) 奈良間美保著者代表: 系統看護学講座 専門分野 II 小児看護学1. 医学書院, 103, 2012.

A Consideration on Support for Breast Cancer Patients and their Children by Using “Support Book” – With the Clue of Children’s Descriptive Contents –

Kiyotoshi TAKAYAMA, Tomoe MAKINO, Yuriko MATSUMOTO, Akiko KATO,
Erina NOGUCHI, Takanori WAGATSUMA, and Fukumi KITAMOTO

Abstract

The purpose of this study is to characterize the descriptive contents of the child of the breast cancer patients (mothers) and the conversation between them in the making process of “Support Book (Hereinafter referred to as SB)”, and to consider the effect of SB. In the contents of SB made by five pairs of parent and child who joined in the program called “OYAKONO TANOSHIJIKAN” which supports breast cancer patients and their child, the descriptive contents of their child and the contents of their conversation during making process are the objects of this study.

As a result of analyzing the data qualitative and inductive, three categories like “Consideration for parents”, “Everyday parent’s image” and “Memorable events for the child” were extracted as the characteristics of the child’s descriptive contents in SB; besides six categories like “Characteristics of child’s responses according to their developmental stages”, “The situation the child enjoys in his/her own way” and “Parent and child enjoy their conversation” were extracted as the characteristics of the dialogue contents.

As the effects of making SB by the parents and their child together, the parents enjoyed taking obedient message from their child and they also enjoyed the making process according to their child’s developmental stages and it is suggested that those experiences strengthen the communication between them.

Keyword support book, support for parents and children, children of breast cancer patients, family